

スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属する大学生の ライフスキル

伊 藤 潔

令和元年6月19日受理

Current Status of Life Skills Acquisition Among non-athletic Majors Who Belong to Sports Clubs

Kiyoshi ITO

目 次

1. はじめに
2. 研究方法
 - 2.1 調査対象・時期・手続き
 - 2.2 調査内容
 - 2.2.1 調査用紙の概要
 - 2.2.2 検討項目
 - 2.2.3 統計処理
3. 結果および考察
 - 3.1 対象者の特徴
 - 3.2 本研究と先行研究のライフスキル得点の比較
 - 3.3 ライフスキル得点の性差による比較
 - 3.4 ライフスキル得点の学年による比較
 - 3.5 ライフスキル得点の競技形態による比較
 - 3.6 ライフスキル得点の競技タイプによる比較
4. 結論

謝辞

参考文献

資料: アンケート調査用紙

1. はじめに

2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会が東京都で開催されることが決定したことや、オリンピック競技に新たなスポーツ種目が追加されることにより、我が国ではスポーツ人気が高まっていることが推測される。このことが影響しているせいなのか、大学においては体育学部やスポーツ科学部などと異なる研究領域の学部・学科においても運動部活動に所属し、

プロ選手やハイレベルな競技成績を目指す大学生が増加している現状がみられる。

これらの学生はスポーツ分野以外の講義を受講し、課外活動ではそれぞれの運動部活動で高強度のトレーニングを行い、競技スキルの獲得や向上に励んでいることが予測できる。いわば、従来の体育学部でスポーツ全般について幅広く学修し、そこで得られた知識や方法論を活かして運動部活動に専念する従来のスタイルとは異なった教育環境で競技パフォーマンスを向上し

ようとしているのである。この取り組みからは「学問」と「スポーツ」の両立を目指す姿勢が窺われる。すなわち、ハイレベルな運動部活動に所属する学生がスポーツ系以外の学科で学位を取得することで「文武両道」を成し遂げていることになる。しかしながら、スポーツ研究領域以外の学問を学修することは、高い目標設定をしている運動部活動生には極めて困難であるため、学修意欲を失う学生も多数存在することが予測される。

このような現状を踏まえ、運動部活動生の学修支援の一環として、幼少期から運動部活動で培ってきた自己認識、自制心、メタ認知ストラテジーなどの非認知能力（中室，2015）と類似した尺度を持つ「ライフスキル」の獲得状況データを学修指導に活用することを検討したい。具体的には、運動部活動生のライフスキル獲得に関するデータを学生自身が把握し、自らの人間的な「強み」や「弱み」を知り、「強み」の部分を自覚させ、学修への自信を持たせることで大学における主体的な「学び」に対するモチベーションを向上させたい。一度、学修に対する「自己効力感」が高まれば、学修意欲喚起に繋がるということが推測される。加えて、各々のライフスキル獲得状況を把握することは、ライフスキルそれ自体の向上意欲にも繋がることが期待できる。

本研究では非認知能力を構成する尺度と類似する尺度を持つ、大学生における「日常生活スキル尺度（大学生版）」（島本，石井，2006）を用いて「スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属する大学生」のライフスキル獲得状況を、より適切な学修指導の実現のために性差、学年、競技形態、および先行研究では検討されていない競技タイプによる差異を考慮に入れて明らかにした。また、本研究でのライフスキル得点の客観的位置付けを示すために「体育・スポーツ系学科の運動部活動生」（山本，島本，2015）や高い競技力を求める運動部活動に所属していない、いわゆる「一般大学生」（島本，石井，2006）とのライフスキル得点の比較を行った。

得られた知見はスポーツ以外の研究領域の学問を学修しながらもトップアスリートを目指す運動部活動生への学修意欲喚起のための基礎資料として活用して頂ければ幸いである。

2. 研究方法

2.1 調査対象・時期・手続き

調査は経済系学科に在籍する大学生で筆者の講義を受講した計134名を対象とし2018年7月に実施した。講義の冒頭に調査の主旨を説明し、回答内容は統計的に処理され、個人が特定されることがないこと、得られた情報を本研究以外で用いることがないこと、途中で回答をやめても不利益を被らないことを申し添えた。

その後、アンケート調査用紙を学生に配付し、回答に協力して頂いた134名から回収した。回答に不備が確認された5名の回答、少数であった経済学科に所属する3名の回答、および運動部活動に所属していない9名の回答を除外した。その結果、経営法学科に所属する学生117名（男子79名、女子38名）の回答を研究対象データとした。

2.2 調査内容

2.2.1 調査用紙の概要

問1の「フェイスシート」には性別、学年、所属学科、所属部活動の項目を設けた。

問2の「質問文」については、大学生における「日常生活スキル尺度（大学生版）」（島本，石井，2006）を用いた。この尺度は主に個人場面で展開されるスキルを表す「個人的スキル」（計画性、情報要約力、自尊心、前向きな思考）と対人場面で展開されるスキルを表す「対人スキル」（親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナー）の2つの「上位尺度」に大別され、それぞれ4つの「下位尺度」、計8つの「下位尺度」から構成されている。尚、1つの「下位尺度」は3つの質問項目により構成されているため、合計24項目の質問文を用いて評価した。

質問項目の評定は「1：ぜんぜんあてはまら

ない」から「4: とてもあてはまる」の4段階の自己評定で行い、評定値が高いほどライフスキルの獲得レベルが高いことを意味する。尚、逆転項目(Q21.)の評価値は下位尺度得点算出時に反転処理を行った。尚、先行研究(島本, 石井, 2006)により「下位尺度」と「尺度全体」には信頼性と妥当性が認められている。

2.2.2 検討項目

- (1) 対象者の特徴
- (2) 本研究と先行研究のライフスキル得点の比較
- (3) ライフスキル得点の性差による比較
- (4) ライフスキル得点の学年による比較
- (5) ライフスキル得点の競技形態(個人競技 or 団体競技)による比較
本研究では「個人競技」とは個人種目を実施する競技, 「団体競技」とは団体種目のみを実施する競技と定義する。
- (6) ライフスキル得点の競技タイプ(ネット型・ゴール型・ベースボール型・その他種目)による比較

2.2.3 統計処理

ライフスキルの特徴を把握するために全体の記述統計量(表2)を算出した。性差(表3)および競技形態(表5)による比較についてはt検定を用い、学年(表4)および競技タイプ(表6)による比較には1要因分散分析を用いた。有意水準5%未満を統計学的有意と判断した。

3. 結果および考察

3.1 対象者の特徴

表1には対象者の特徴を示した。対象者は経営法学科に所属する1年生から4年生で運動部活動に所属する大学生であった。男女比は男子67.5%, 女子32.5%と男子学生の割合が女子学生よりも2倍ほど高かった。対象者を学年別にみると4年生が全体の18.8%で最も少なく、2年生が31.6%で最も多かった。他の学年は

20%台であり、学年間に有意な差はみられなかった。所属運動部活動については球技種目が男女共に圧倒的に多く全体の92.3%を占め、性別にみると男子97.5%, 女子81.6%であった。さらに競技タイプ別にみると、球技種目の中でも男子の硬式野球と女子のソフトボールを合わせたベースボール型競技が全体の52.1%を占め、次いでゴール型競技が28.2%, ネット型競技が12.0%であった。その他の種目は少数であり、武道である柔道・剣道とゴルフ, 陸上競技を合わせても7.7%であった。

表1には項目は設けられていないが、競技形態別にみると、団体種目のみ実施する団体競技はベースボール型の硬式野球とソフトボール, ゴール型のバスケットボール, ハンドボール, サッカー, ネット型のバレーボールで全体の82.9%と多数を占め、個人競技はネット型のバトミントン, テニス, 卓球とその他種目の柔道・剣道, ゴルフ, 陸上競技で17.1%と少数であった。

3.2 本研究と先行研究のライフスキル得点の比較

表2には、本研究結果である「スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属する大学生」のライフスキル得点, 「体育・スポーツ系学科で運動部活動に所属する大学生」(山本, 島本, 2015)のライフスキル得点, および「一般大学生」(島本, 石井, 2006)のライフスキル得点の単純集計を比較して示している。

まず、本研究結果と「一般大学生」(島本, 石井, 2006)を対象とした先行研究結果を比較すると、上位尺度「個人的スキル」を構成する下位尺度「自尊心」の「自分の今までの人生に満足している」の項目, および上位尺度「対人スキル」を構成する下位尺度「対人マナー」の「初対面の人に対しては言葉づかいに気をくばることができる」の項目では本研究結果のライフスキル得点が先行研究の結果より僅かに下回ったが、その他20項目で本研究結果のライフスキル得点が上回り、残り2項目(下位尺度:

表 1. 対象者の特徴

	全体		男子		女子	
	n	%	n	%	n	%
学 年	117	100.0	79	67.5	38	32.5
1 年生	24	20.5	17	21.5	7	18.4
2 年生	37	31.6	26	32.9	11	28.9
3 年生	34	29.1	19	24.1	15	39.5
4 年生	22	18.8	17	21.5	5	13.2
球 技 種 目	108	92.3	77	97.5	31	81.6
ベースボール型	61	52.1	43	54.4	18	47.4
硬式野球†	43	36.8	43	54.4	0	0.0
ソフトボール‡	18	15.4	0	0.0	18	47.4
ゴール型	33	28.2	21	26.6	12	31.6
バスケットボール†	11	9.4	2	2.5	9	23.7
ハンドボール†	7	6.0	4	5.1	3	7.9
サッカー†	15	12.8	15	19.0	0	0.0
ネット型	14	12.0	13	16.5	1	2.6
バドミントン‡	6	5.1	6	7.6	0	0.0
テニス‡	3	2.6	3	3.8	0	0.0
バレーボール†	3	2.6	3	3.8	0	0.0
卓球‡	2	1.7	1	1.3	1	2.6
そ の 他 種 目	9	7.7	2	2.5	7	18.4
柔道‡	5	4.3	0	0.0	5	13.2
剣道‡	1	0.9	0	0.0	1	2.6
ゴルフ‡	2	1.7	1	1.3	1	2.6
陸上競技‡	1	0.9	1	1.3	0	0.0

†：団体種目のみを実施する競技，‡：個人種目を実施する競技

対人マナー)で同得点であった。

本研究結果のライフスキル得点が先行研究より著しく高かった項目は上位尺度「個人的スキル」を構成する下位尺度「前向きな思考」の「いやなことがあってもいつまでもくよくよ考えない」および上位尺度「対人スキル」を構成する下位尺度「リーダーシップ」の「話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる」の項目であった。これらの結果は運動部活動で育成される「回復力と対処能力」や「社会的適性」などの非認知能力(中室, 2015)が高いことが影響していると考えられる。

次に本研究結果と「体育・スポーツ系学科で運動部活動に所属する大学生」(山本, 島本, 2015)を対象とした先行研究結果を比較すると、上位尺度「個人的スキル」を構成する下位尺度「自尊心」の「自分の今までの人生に満足している」の項目で本研究結果のライフスキル得点が先行研究と同得点であったが、その他23項目全てにおいて先行研究よりライフスキル得点が高かった。このことから、体育・スポーツ系研究領域にある学問を学修しながら運動部活動を行うよりも、スポーツ活動とは無縁と感じられる経営学や法学などを学修しながら運動部活動を行うほうがライフスキル獲得には効果

表 2. 本研究と先行研究のライフスキル得点の比較

尺度		ライフスキル項目	本研究 (2018)		山本・島本 (2015)		島本・石井 (2006)	
上位	下位		n=117		n=79		n=726	
			M	SD	M	SD	M	SD
個人的スキル	計画性	先を見通して計画を立てることができる	2.71	0.73	2.63	0.89	2.54	0.81
		課題が出ると、提出期限等を自ら決めるなどの工夫をしてやる気を出す	2.74	0.79	2.63	0.96	2.38	0.95
		やるべきことをテキパキと片づけることができる	2.72	0.67	2.65	0.93	2.53	0.85
	情報要約力	手に入れた情報を使って、より価値の高いものを生み出せる	2.63	0.69	2.51	0.93	2.33	0.68
		数多くの情報の中から、本当に必要な情報を手に入れることができる	2.79	0.61	2.52	0.80	2.65	0.66
		多くの情報を基に自分の考えをまとめることができる	2.71	0.67	2.49	0.81	2.57	0.73
	自尊心	自分のことが好きである	2.62	0.81	2.42	0.97	2.54	0.83
		自分の今までの人生に満足している	2.56	0.85	2.56	1.02	2.57	0.88
		自分の言動に対して自信をもっている	2.52	0.71	2.51	0.92	2.38	0.74
	前向きな思考	いやなことがあってもいつまでもよくよと考えない	2.85	0.82	2.47	1.01	2.47	0.94
こまった時でも「何とかなるだろう」と楽観的に考えることができる		3.06	0.71	2.63	1.00	2.94	0.92	
何かに失敗した時に、すぐ自分はダメな人間だと思ってしまう (R)		2.51	0.82	2.38	0.77	2.33	0.95	
対人スキル	親和性	困った時に、友人らに気軽に相談することができる	3.31	0.67	2.75	1.02	3.18	0.83
		親身になって友人らに相談に乗ってもらえることができる	3.27	0.67	2.66	1.01	3.12	0.87
		どんな内容のことでも友人らと本音で話し合うことができる	3.21	0.65	2.78	1.09	3.20	0.89
	リーダーシップ	話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる	2.79	0.73	2.59	0.88	2.38	0.81
		集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張って行くことができる	2.58	0.75	2.41	0.93	2.35	0.81
		自分が行動を起すことによって、周囲の人を動かすことができる	2.67	0.68	2.52	0.90	2.49	0.72
	感受性	困っている人を見ると援助をしてあげたくなる	3.26	0.58	2.82	0.92	2.95	0.77
		他人の幸せを自分のことのように感じるができる	3.00	0.63	2.68	1.03	2.71	0.84
		悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる	2.95	0.79	2.68	0.93	2.94	0.85
	対人マナー	目上の人の前では礼儀正しく振舞うことができる	3.23	0.64	2.92	1.07	3.23	0.68
年上の人に対しては敬語を使うことができる		3.37	0.58	2.95	1.20	3.37	0.71	
初対面の人に対しては言葉づかいに気をくばることができる		3.37	0.57	2.67	0.94	3.39	0.71	

(R) は逆転項目

研究対象者

本研究 (2018) : スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属する大学生

山本・島本 (2015) : 体育・スポーツ系学科で運動部活動に所属する大学生

島本・石井 (2006) : 一般大学生

的であると考えることが出来る。すなわち、スポーツ分野以外の全く別領域の教育を受けることにより学修や思考の幅が広がったことが「個人的スキル」獲得に貢献し、これまでの信頼関係を築いてきた運動部活動の指導者やスポーツ研究者とは異なる背景知識や思考パターンを持った経営法学科の教員と良好な関係を築けたことが「対人スキル」獲得の要因であると言える。

3.3 ライフスキル得点の性差による比較

表3には上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」、およびそれぞれ4つの下位尺度のライフスキル得点を男女別に示している。

上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」はどちらにおいても性差により有意差はみられなかった。しかしながら、上位尺度「対人スキル」を構成する下位尺度の中で、相手の気持ちへ感情移入するスキルを表す「感受性」においては女子学生が男子学生より有意に高いライフスキル得点を示した ($t=2.68$, $df=115$)。この結果は「一般大学生」を対象とした先行研究結果(山本, 島本, 2015)と一致しており、女子学生は男子学生よりも仲間内での親しい関係を構築・維持するスキルが高いと言える。

他の下位尺度については有意ではないが「個

人的スキル」を構成する下位尺度の「情報要約力」と「前向きな思考」において男子学生の得点が高く、その他の下位尺度は全て女子学生の得点が高かった。先述した先行研究(山本, 島本, 2015)でも下位尺度である「前向きな思考」を除けば、他のすべての下位尺度で女子学生のライフスキル得点が男子学生より高かったことが報告されている。このことから、女子学生は男子学生よりライフスキルが高いことが推測される。

3.4 ライフスキル得点の学年による比較

表4には上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」、およびそれぞれ4つの下位尺度のライフスキル得点を学年別に示している。

上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」はどちらにおいても学年間で有意差はみられなかった。一方、下位尺度においても全ての尺度で有意差はみられなかった。これらの結果から高学年になってもライフスキルが向上していないことが推測できる。すなわち、入学時のライフスキルを大学生生活で維持することは出来たが、向上させることは出来なかったと言える。それゆえ、大学生にライフスキルという概念を認識させ、各々のライフスキル獲得状況を明示し、目標設定させてのライフスキル獲得の

表3. ライフスキル得点の性差による比較

	男子 (n=79)		女子 (n=38)		t (df=115)	p	ES
	M	SD	M	SD			
個人的スキル	32.34	4.84	32.55	5.16	0.22	0.83	0.04
計画性	8.10	1.79	8.29	1.89	0.52	0.60	0.10
情報要約力	8.18	1.77	8.03	1.48	0.46	0.65	0.09
自尊心	7.63	1.93	7.84	1.87	0.56	0.58	0.11
前向きな思考	8.43	1.77	8.39	1.88	0.10	0.92	0.02
対人スキル	36.52	5.16	38.03	4.35	1.55	0.12	0.31
親和性	9.59	1.88	10.18	1.50	1.69	0.09	0.33
リーダーシップ	8.03	1.85	8.08	1.89	0.14	0.89	0.03
感受性	8.96	1.68	9.74	1.35	2.68*	0.01	0.53
対人マナー	9.94	1.60	10.03	1.28	0.30	0.76	0.06

M: 平均値, SD: 標準偏差, df: 自由度, ES: 効果量, *: $p<0.05$ (両側検定)

表 4. ライフスキル得点の学年による比較

	1 学年		2 学年		3 学年		4 学年		F(df=3)	η^2	p
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
個人的スキル	32.21	5.94	31.81	4.38	33.00	5.48	32.78	3.71	0.38	0.01	0.77
計画性	7.79	1.89	7.86	1.75	8.47	1.88	8.59	1.68	1.42	0.04	0.24
情報要約力	8.33	1.95	7.92	1.67	8.29	1.72	8.00	1.31	0.46	0.01	0.71
自尊心	8.25	1.85	7.43	1.82	7.82	2.12	7.36	1.71	1.19	0.03	0.32
前向きな思考	7.83	2.06	8.59	1.74	8.41	1.60	8.77	1.85	1.26	0.03	0.29
対人スキル	37.29	5.10	35.76	3.92	37.91	4.42	37.41	6.73	1.25	0.03	0.30
親和性	9.96	1.68	9.62	1.42	9.85	1.54	9.77	2.67	0.19	0.01	0.90
リーダーシップ	7.63	1.97	7.95	1.65	8.29	1.96	8.27	1.93	0.75	0.02	0.52
感受性	9.63	1.79	8.70	1.54	9.47	1.44	9.23	1.66	0.10	0.05	0.10
対人マナー	10.08	1.35	9.49	1.41	10.29	1.38	10.14	1.86	0.12	0.05	0.12

M: 平均値, SD: 標準偏差, df: 自由度, η^2 : 効果量, *: $p < 0.05$

指導が必要である。また、ライフスキル向上の指導を学修指導と連携することで学修意欲を喚起し、教育効果を高めることに繋げることが望ましいと考える。

3.5 ライフスキル得点の競技形態による比較

表 5 には上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」、およびそれぞれ 4 つの下位尺度のライフスキル得点を競技形態別（個人競技 or 団体競技）に示している。

上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」はどちらにおいても競技形態で有意差はみられなかった。一方、下位尺度においても全ての尺度において有意差はみられなかった。これらの結果から、どちらの競技形態の運動部活動に所属してもライフスキル獲得には違いがないと言える。従って、ライフスキル得点を用いて競技形態で学修指導に差異を設ける必要はないと考える。

表 5. ライフスキル得点の競技形態による比較

	個人競技 (n=20)		団体競技 (n=97)		t(df=115)	p	ES
	M	SD	M	SD			
個人的スキル	31.90	4.75	32.52	4.98	0.51	0.61	0.03
計画性	8.30	2.30	8.13	1.71	0.37	0.71	0.02
情報要約力	7.80	1.64	8.20	1.68	0.96	0.34	0.06
自尊心	7.45	1.99	7.75	1.89	0.65	0.52	0.04
前向きな思考	8.35	1.18	8.43	1.90	0.19	0.85	0.01
対人スキル	36.35	5.08	37.14	4.94	0.65	0.52	0.04
親和性	9.45	1.76	9.86	1.79	0.93	0.36	0.06
リーダーシップ	7.70	1.78	8.11	1.88	0.91	0.37	0.05
感受性	9.10	1.59	9.24	1.63	0.35	0.73	0.02
対人マナー	10.10	1.45	9.94	1.52	0.44	0.66	0.03

M: 平均値, SD: 標準偏差, df: 自由度, ES: 効果量, *: $p < 0.05$ (両側検定)
個人競技: 個人種目がある競技, 団体競技: 団体種目のみの競技

表 6. ライフスキル得点の競技タイプによる比較

	ネット型 (n=14)		ゴール型 (n=33)		ベースボール型 (n=61)		その他種目 (n=9)		F(df=3)	η^2	p
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
個人的スキル	32.36	5.64	32.30	4.79	32.51	5.12	32.22	3.35	0.02	0.00	1.00
計画性	8.07	2.43	8.03	1.69	8.18	1.76	8.67	1.80	0.30	0.01	0.83
情報要約力	8.36	1.99	7.85	1.70	8.31	1.63	7.56	1.33	0.99	0.03	0.40
自尊心	7.79	2.26	7.61	1.92	7.79	1.89	7.33	1.58	0.19	0.00	0.91
前向きな思考	8.14	1.29	8.82	1.90	8.23	1.89	8.67	1.32	0.94	0.02	0.43
対人スキル	37.21	5.19	36.27	4.58	37.52	5.19	35.89	4.40	0.62	0.02	0.60
親和性	9.43	1.87	9.85	1.97	9.87	1.73	9.56	1.42	0.29	0.01	0.83
リーダーシップ	8.29	1.73	7.79	2.03	8.25	1.82	7.22	1.56	1.12	0.03	0.35
感受性	9.14	1.66	9.03	1.72	9.31	1.60	9.33	1.41	0.24	0.01	0.87
対人マナー	10.36	1.55	9.61	1.48	10.10	1.55	9.78	1.09	1.16	0.03	0.33

M: 平均値, SD: 標準偏差, df: 自由度, η^2 : 効果量, *: $p < 0.05$

その他種目: 柔道・剣道, ゴルフ, 陸上

3.6 ライフスキル得点の競技タイプによる比較

表 6 には上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」、およびそれぞれ 4 つの下位尺度のライフスキル得点を競技タイプ別(ネット型・ゴール型・ベースボール型・その他種目)に示している。

上位尺度である「個人的スキル」と「対人スキル」はどちらにおいても競技タイプで有意差はみられなかった。一方、下位尺度においても全ての尺度において有意差はみられなかった。これらの結果から、どの競技タイプの運動部活動に所属してもライフスキル獲得には違いがないと言える。従って、ライフスキル得点を用いて競技タイプで学修指導に差異を設ける必要はないと考える。

4. 結 論

スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属している大学生のライフスキル得点は「体育・スポーツ系学科の運動部活動生」(山本, 島本, 2015) や「一般大学生」(島本, 石井, 2006) より有意差はないものの全般的に上回ってい

た。このことは、少なくともスポーツ領域以外の学問を学修しながら運動部活動で高い目標を設定して活動することは、ライフスキル獲得に悪影響を与えていないことを意味する。むしろ、今後の取り組み方次第ではライフスキルの向上を期待することが出来る。

学年が上がることでライフスキル得点が上昇しなかったことは今後の課題である。ライフスキル獲得状況を学生にフィードバックし、ライフスキルの獲得を促進させ、蓄積されたライフスキルにより 4 年生のライフスキル得点を最高値にするための指導方法の作成が必要である。

競技形態や競技タイプにおいてはライフスキル獲得に違いはみられなかったため、学修指導において特段配慮する必要はないと言えるが、女子学生は相手の気持ちへ感情移入する「感受性」スキルが男子学生より有意に高いため、女性の特性を考慮に入れての学修指導方法を考案すべきである。

スポーツ系以外の学科で運動部活動に所属する大学生のライフスキルを把握し向上させ、学修活動に連動性を持たせ学修意欲を喚起、促進させる方法論の開発は喫緊の課題である。

謝 辞

本研究の実施にあたりアンケート調査に快くご協力して頂いた学生の皆様には衷心より御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 島本好平, 石井源信 (2006) 「大学生における日常生活スキル尺度の開発」, 『教育心理学研究』, 第 54 巻, pp. 211-221.
- 中室牧子 (2015) 『「学力」の経済学』, ディスカヴァー・トゥエンティワン, pp. 85-98.
- 山本浩二, 島本好平 (2015) 「体育系大学生におけるライフスキルと学業成績との関連」, 『神戸医療福祉大学紀要』, 第 16 巻第 1 号, pp. 93-103.

資料：アンケート調査用紙

____年 ____月 ____日 (____) 授業科目名 _____

ライフスキル獲得に関するアンケート調査のお願い

富士大学 経済学部 経営法学科 准教授 伊藤 潔

大学生の人格を陶冶させ、学問を修得させる為には日頃の学修指導および生活指導が肝要です。それぞれの指導効果を高めるには大学生のライフスキルの現状を客観的に把握し、得られた情報に基づいての指導方法の検討が求められます。今回、私は大学生への教育方法の開発の一助とするために大学生のライフスキル獲得状況の研究に着手しました。

ご回答頂いた内容は統計処理され、個人が特定されることはありません。また本研究以外で用いることもありません。回答者が本アンケート調査について回答されなくても、また回答中に途中で回答を中止しても、不利益を被ることはありません。同意頂ける方は、以下の問1：フェイスシート、問2：質問文、についてご回答を宜しくお願いします。

問1：フェイスシート

一般的なことをお聞きいたします。あてはまるものの数字に丸印をつけてください。

性別 1：男性 2：女性

学年 1：1年生 2：2年生 3：3年生 4：4年生 5：その他 (_____)

所属学科 1：経済学科 (E) 2：経営法学科 (M)

所属部活動

- 1：硬式野球 2：準硬式野球 3：ソフトボール 4：バスケットボール
5：サッカー 6：ハンドボール 7：卓球 8：テニス 9：バドミントン
10：バレーボール 11：柔道 12：剣道 13：ボクシング
14：陸上競技 15：自転車競技 16：ゴルフ 17：運動部に所属していない
18：その他の部活動や活動団体などを記入して下さい (例：学友会)。

問2：質問文

みなさんの日常生活全体の様子についてお聞きします。以下の各文書を読んで、現在の自分に最もあてはまる選択肢の数字の1つに丸印をつけてください。

Q1. 困った時に、友人らに気軽に相談することができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q2. 親身になって友人らに相談に乗ってもらうことができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q3. どんな内容のことも友人らと本音で話し合うことができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q4. 話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q5. 集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q6. 自分が行動を起すことによって、周囲の人を動かすことができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q7. 先を見通して計画を立てることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q8. 課題が出ると、提出期限等を自ら決めるなどの工夫をしてやる気を出す

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q9. やるべきことをテキパキと片づけることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q10. 困っている人を見ると援助をしてあげたくなる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q11. 他人の幸せを自分のことのように感じるすることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q12. 悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q13. 手に入れた情報を使って、より価値の高いものを生み出せる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q14. 数多くの情報の中から、本当に必要な情報を手に入れることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q15. 多くの情報を基に自分の考えをまとめることができる

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q16. 自分のことが好きである

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q17. 自分の今までの人生に満足している

1：ぜんぜんあてはまらない 2：あてはまらない 3：あてはまる 4：とてもあてはまる

Q18. 自分の言動に対して自信をもっている

- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q19. いやなことがあってもいつまでもくよくよ考えない
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q20. こまった時でも「何とかなるだろう」と楽観的に考えることができる
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q21. 何かに失敗した時に、すぐ自分はダメな人間だと思ってしまう
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q22. 目上の人の前では礼儀正しく振舞うことができる
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q23. 年上の人に対しては敬語を使うことができる
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる
- Q24. 初対面の人に対しては言葉づかいに気をくばることができる
- 1: ぜんぜんあてはまらない 2: あてはまらない 3: あてはまる 4: とてもあてはまる

ご協力ありがとうございました。